

研究論文

作業科学を学んだ作業療法士の主観的变化

福田久徳^{1,2)}, 吉川ひろみ³⁾

1) 賀茂台地訪問看護ステーション

2) 県立広島大学大学院 総合学術研究科 保健福祉学専攻所属

3) 県立広島大学 保健福祉学部

要旨：作業科学（OS）を学んだ作業療法士はどのような変化を感じているのかを調査するために、インタビューに基づいた質問票を用いて調査を行った。OS セミナー参加者に調査票を配布し、回答を求めた結果、OS セミナー参加者182名中、112名からの回答が得られた。多くの参加者はOS学習により、作業の視点を心得、作業の意味付けが増えたと回答した。そして、作業療法実践が明確になった、作業療法士像が明確になったとの回答が得られ、作業療法士としてのアイデンティティにも良い影響を与える可能性が示唆された。さらに、OSの学習法は、授業や研究、自己学習、他者との学習の3種に大別できた。

作業科学研究, 6, 27-33, 2012.

キーワード：作業科学, 作業療法, 作業に基づいた実践, 専門職アイデンティティ

Research Article

Subjective change of occupational therapists after learning occupational science

Hisanori FUKUDA^{1,2)}, Hiromi YOSHIKAWA³⁾

1) Kamodaichi Home Visit Nursing Station, 2) Student of Graduate School of Comprehensive Scientific Research, Prefectural University of Hiroshima, 3) Prefectural University of Hiroshima

The purpose of this research is to investigate subjective change of occupational therapists after learning occupational science. Respondents of questionnaire were 112 out of 182 participants in an occupational science seminar. Respondents learned perspectives on occupation and diverse meanings of occupation. Occupational therapy practice clarified focusing on occupation. In addition, occupational science contributed to establishing professional identity. The study methods of occupational science were categorized into 3 types; 1) formal learning such as taking classes, 2) self learning such as reading articles, and 3) mutual learning such as conversation focusing on occupation in clinical practice and other opportunities.

Japanese Journal of Occupational Science, 6, 27-33, 2012.

Key words: Occupational science, Occupational therapy, Occupation-based practice, Professional identity

I. はじめに

作業科学（OS）は1989年に南カリフォルニア大学で誕生した（Yerxa, 1993）。1990年から2000年の間にOSは国際的な広がりを見せ、多様な機関誌への掲載と論文数の増加が認められている（Molke 他, 2004）。Frank (2012) は、OSが作業療法から独立した学問であるとしながらも、OSと作業療法の関係性について述べ、作業が健康やより良い状態に関係するという立場は共通していると述べて

おり、MounterとIlott (2000) は、作業と健康の関係を明確にするOS研究は、作業療法実践の基になると述べている。Clark (2006) やYerxa (2000) も作業の知識が作業療法に役立つとしている。Clark (2006) はOSと作業療法は相互に深く関係し、共生することが互いの発展につながるということを述べ、Yerxa (1993, 2000) はOSが作業療法実践に必要な作業の知識を与えるとしている。また、世界作業療法士連盟 (2012) は、OSに関す

る声明書において、「人間作業の理解と可能化についての知識と技能は、作業の教育の必須基盤である」、「OS は、作業に焦点を当てた作業療法実践と研究のための理論枠組みを提供する」、「作業療法の治療手段、最終目標の両方としての作業の豊潤な理解を提供することによって、効果的な作業療法実践を支える」、「OS から生まれた概念は、作業療法士がクライアントの主観的経験、独特な見方、また背景状況を考慮するということを理解するのに役立つ」とし、OS が作業療法にとって重要であるとしている。2002 年から 2006 年の 5 年間に対象に行われた OS 関連論文のレビューでは、作業に関する研究として、個人の作業の経験に関する研究が 33%、特定の背景が作業に与える影響に関する研究が 29%、作業の適応など作業の変化に関する研究が 20%、作業バランスや作業の習慣など、作業の記述に関する研究が 18%であったとし、このような作業の知識が作業療法及び作業療法士に役立つものであると結論づけている (Pierce 他, 2010)。しかし、これらの論文は OS が作業療法実践に与える影響を調査しているものではなく、実際に OS がより良い作業療法に結び付いているのかは不明である。一方、近藤ら (2010) は OS が作業療法学生に与える影響を調査し、OS 教育が職業的アイデンティティの構築に貢献することを述べている。しかし、近藤らの調査は作業療法学生を対象としており、OS が臨床で働く作業療法士の職業的アイデンティティに影響を与え得るかはこの研究からは明らかとなっていない。OS が作業療法士及び作業療法実践に良い影響を与える可能性があるということは上記の論文で述べられているが、実際に OS を学んだ作業療法士に対する調査はこれらの論文からは見受けられず、どのような変化が認められたのかは明らかとなっていない。

そこで、本研究の目的は、OS を学んだ作業療法士はどのような変化を感じているか、その変化が、より良い作業療法実践に結び付く可能性があるのかについて調査することとした。

II. 方法

OS 学習後の作業療法士の主観的变化を知るための質問票を作成するために、質的記述的研究法 (グレッグ他, 2007) を用い、OS 学習経験のある作業療法士へのインタビューを行った。インタビューは、フォーカスグループと個別インタビューで対象者は 9 名であった (表 1)。データ産出はインタビューの書き取りにて行い、「OS を学ぼうと思ったのはなぜですか」、「OS を学ぶことで作業療法に役立ったことはありますか」、「OS はどのように作業療法実践に役立ちましたか」という開放型の質問を実施

参加者	インタビュー形式	経験年数	領域
A	グループ	8	養成校・身障・発達
B	グループ	11	身障・発達・訪問
C	グループ	11	養成校・発達・学校
D	グループ	7	身障・発達・精神・訪問
E	グループ	23	養成校・発達・学校
F	個別	7	身障
G	個別	13	その他
H	個別	13	発達
I	個別	7	身障

表1 インタビュー対象者の詳細

した。さらに、対象者には適宜質問を追加し、インタビューを実施した。分析は筆頭著者と質的研究の経験を持つ共著者の 2 名で行った。分析過程は、まず記述したデータを出来事ごとのコードに分け、コードの相違点や共通点について比較した。この段階では、必要に応じて修正を繰り返し、概念の抽象度を上げる様に努めた。そして、修正・分類したコードに共通する名前を付けてサブカテゴリーを形成した。最後に、幾つかのサブカテゴリーに共通する名前を付け、カテゴリーを形成した。

次に、インタビュー結果に基づいて、質問票を作成した (表 2)。質問票では、OS を学ぶ意義と OS を学ぶために経験した (実施した) 方法、これから行う予定のある勉強方法について尋ねた。OS を学ぶ意義は、OS を学ぶことは面白いなどの良い経験になる、自分が成長する、思考が柔軟になる、多様な学問へと関心が広がる、社会や環境への関心が高まる、作業の視点を獲得、作業の意味付けが増える・深まる、自分の実践に自信がもてる、作業療法士像が明確になる、作業療法実践が明確になる、作業療法をうまく説明できる、作業療法でよりよい成果を出せる、の 12 項目であった。セミナー参加者が経験した OS を学ぶ方法及びこれから行う予定がある勉強方法では、養成校や大学での授業、大学院の授業、研究を行う、書籍・論文を読む、セミナー・学会・研修会参加、仲間との勉強会、作業に焦点を当てた会話、他者の作業の話聞く、他者への説明、インターネットによる表現や交流、作業に焦点を当てた実践を通しての 11 項目であった。各項目に対して、とてもそう思う、まあそう思う、あまり思わない、全く思わない、わからない、の 5 段階評価とした。作成した質問票は OS セミナーにて配布し、回答を求めた。セミナー参加者 182 名に回答を求めた結果、112 名から回答を得ることができた (表 3)。得られた回答は、単純集計を行い、その後、スピアマンの順位相関行列にて各項目の相関関係を求めた。

表2 質問票

作業療法士が作業科学を学ぶ意義と方法に関する質問票

作業療法士が作業科学を学ぶ意義と方法についてのあなたの考えを教えてください。本研究の結果は、作業科学関連雑誌で報告する予定です。

1. あなたの作業療法士としての経験年数は何年ですか。当てはまる箇所に○をしてください。

1年未満	2～5年未満	5～10年未満	10～20年未満	20年以上

2. あなたの実践領域に関連する箇所に○をしてください。(複数回答)

身体障害	精神科	発達障害	デイケア	訪問	小中学校	OT養成校	その他

3. 作業療法士が作業科学(OS)を学ぶ意義について、あなたの考えに近い箇所に○をしてください。

	とても そう思う	まあ そう思う	あまり 思わない	全く 思わない	わから ない
1. OSを学ぶことは面白いなど良い経験になる					
2. 自分が成長する(考え方の変化、生活改善のきっかけ)					
3. 思考が柔軟になる(人を許せる、多様性を理解できる)					
4. 多様な学問へと関心が広がる(文化人類学など)					
5. 社会や環境への関心が高まる					
6. 作業の視点を育てる(作業的存在としての理解、作業の説明)					
7. 作業の意味づけが増える、深まる					
8. 自分の実践に自信がもてる					
9. 作業療法(OT)像が明確になる					
10. OT実践が明確になる(作業に焦点を当てた実践)					
11. OTをうまく説明できる(多職種やクライアントなどに)					
12. OTでよりよい成果を出せる					
(以下自由記載して下さい)					

4. あなたが経験した作業科学を学ぶ方法について、当てはまる箇所に○をしてください。

	とても そう思う	まあ そう思う	あまり 思わない	全く 思わない	わから ない
1. 養成校や大学での授業					
2. 大学院の授業					
3. 研究を行う					
4. 書籍、論文を読む					
5. セミナー、学会、研修会参加					
6. 仲間との勉強会					
7. 作業に焦点を当てた会話					
8. 他者の作業の話聞く					
9. 他者への説明					
10. インターネットによる表現や交流					
11. 作業に焦点を当てた実践を通して					
(以下自由記載して下さい)					

5. 今後あなたが、行う予定がある作業科学の学習方法に○をしてください

	とても そう思う	まあ そう思う	あまり 思わない	全く 思わない	わから ない
1. 養成校や大学での授業					
2. 大学院の授業					
3. 研究を行う					
4. 書籍、論文を読む					
5. セミナー、学会、研修会参加					
6. 仲間との勉強会					
7. 作業に焦点を当てた会話					
8. 他者の作業の話聞く					
9. 他者への説明					
10. インターネットによる表現や交流					
11. 作業に焦点を当てた実践を通して					
(以下自由記載して下さい)					

表3 調査票回答者(112名)の詳細(領域は複数回答)

1年未満	2～5年未満	5～10年未満	10～20年未満	20年以上	未記入
12(10.7%)	43(38.3%)	29(25.8%)	16(14.2%)	10(8.9%)	2(1.7%)

身体障害	精神科	発達障害	ダイケア	訪問	小中学校	OT養成校	その他	未記入
59(39.8%)	17(11.4%)	9(6%)	9(6%)	13(8.7%)	1(0.6%)	19(12.8%)	16(10.8%)	5(3.3%)

また、倫理的配慮として、インタビューの内容やデータの匿名性を確保すること、知り得た情報を研究目的以外に使用しないこと、いつでも研究を辞退できること、同意出来ない場合や辞退によって不利益を被るものではないことを口頭と書面にて説明し、協力の承諾を得た。なお、本研究は県立広島大学における倫理委員会の承認（第 M11-019 号）を受けている。

III. 結果

OSセミナーでは、112名から質問票の回答を得た。OSを学ぶ意義と方法についての回答結果をそれぞれグラフにまとめた(図1, 2, 3)。回答者の経験年数や実践領域

は多岐に渡っていたが、OS を学ぶ意義についての回答は、とてもそう思う、まあそう思うという回答の和が概ね 9 割を超えており、OS を学ぶことは意義があるという結果が得られた。回答者が経験した OS を学ぶ方法では、養成校での授業や大学院の授業、研究を行うこと、インターネットによる交流や表現は経験が少なく、その他はとてもそう思う、まあそう思うという肯定的な意見が 8 割以上であるという結果となった。今後行う予定がある方法においても、経験した方法とほぼ同様の結果が得られたが、回答者の自由記載欄において、養成校でのカリキュラムに取り入れることの必要性や各地域での小規模なセミナー・勉強会の開催希望を求める声が多く聞かれた。

そして、とてもそう思うを4、まあそう思うを3、あまり思わないを2、全く思わないを1、分からないを0、未記入はNとして、スパイアマンの順位相関行列にて各項目の相関を求め、相関係数が0.4以上のものを示した。OSを学ぶ意義では、15の相関関係が認められ、経験したOSの学習方法では9の相関関係、今後行う予定のある学習方法では18の相関関係が認められた。

OSを学ぶ意義で示された相関関係を基に、関連図を作成した(図4)。OSを学ぶ意義の相関関係では、OSを学ぶことは面白いなど良い経験になるということや思考が柔軟になるということが自分を成長させ、作業の視点や作業の意味付けを増やし、深める結果となっていた。作業の視点や意味付けが増え、深まることで作業療法実践

(作業に焦点を当てた介入)が明確になり、自身の作業療法士像の明確化と作業療法実践に自信が持てることに繋がっていた。そして、作業療法実践に自信が持てることと作業療法を説明できることが作業療法で成果が出せるということに結び付いていた。一方、作業の視点や作業の意味付けが増える、深まることは直接的に作業療法で成果を出せるということと相関関係を認めなかった。

経験したOSの学習方法では、主に3つの関連図にて示すことができた(図5)。1つ目は養成校や大学での授業、

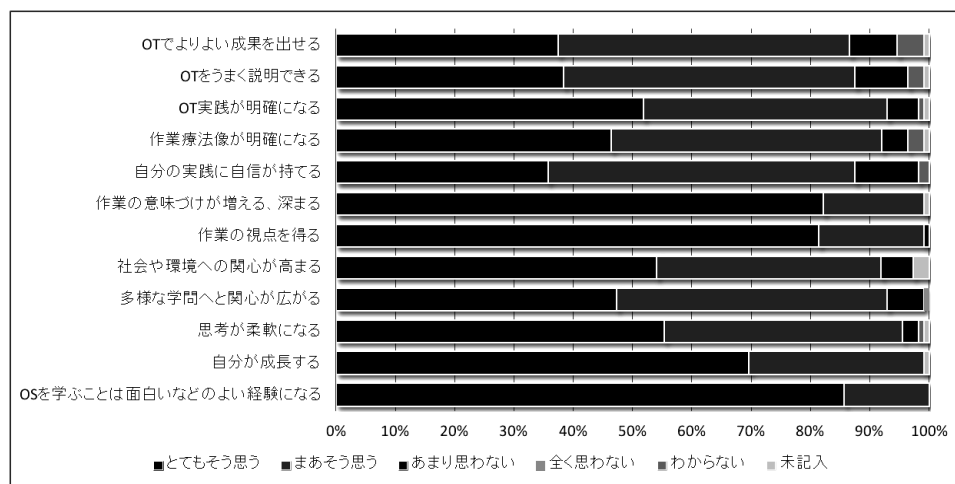


図1 作業科学を学ぶ意義

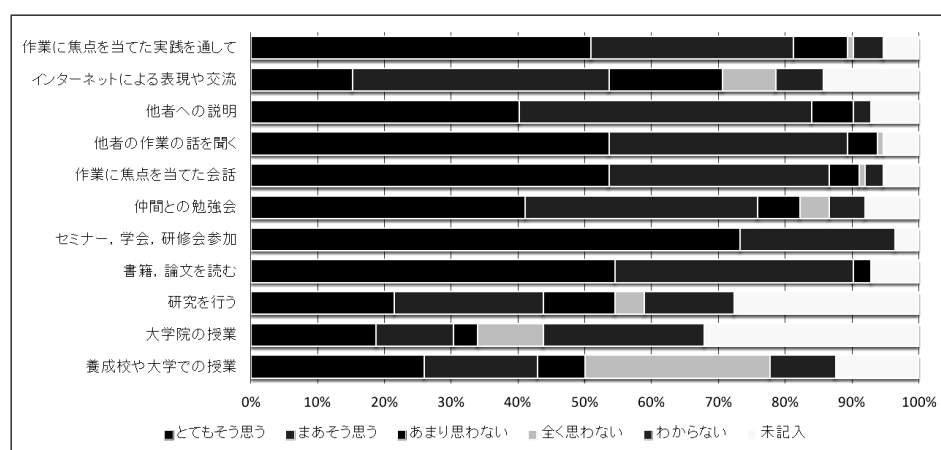


図2 経験した作業科学の学習方法

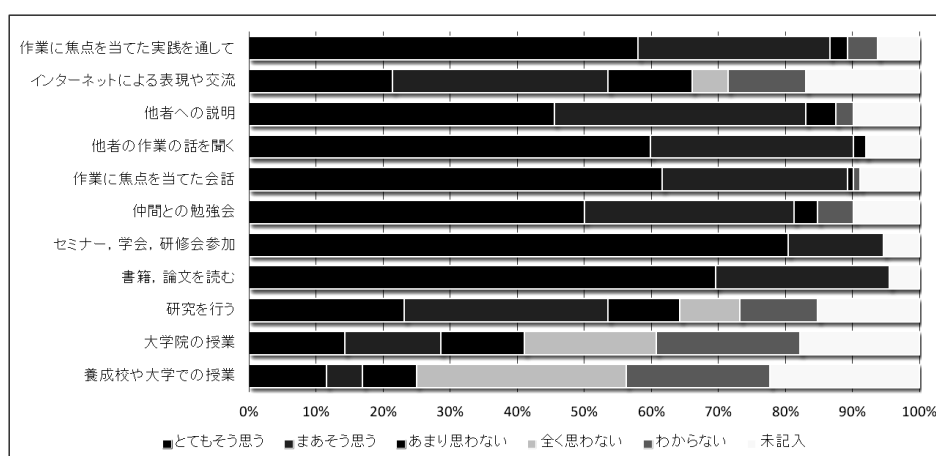


図3 今後予定のある作業科学の学習方法

大学院の授業, 研究を行う, 作業療法士としての経験年数の4カテゴリーの関係であり, 大学院の授業が養成校や大学での授業, 研究を行うことと相関関係を示し, 経験年数と研究を行うことの相関関係も示された. 2つ目はOSの自己学習であり, セミナーへの参加と書籍を読む, の2カテゴリーが相関関係を示していた. 3つ目は他者との学習であり, 仲間との勉強会, 作業に焦点を当てた会話, 作業に焦点を当てた実践, 他者の作業の話を聞く, 他者への説明の5カテゴリーの関係であった. 作業に焦点を当てた会話と作業に焦点を当てた実践, 他者の作業の話を聞く, の3カテゴリーは各々に相関関係を認め, 作業に焦点を当てた会話は仲間との勉強会と相関し, 作業に焦点を当てた実践は他者への説明と相関していた. 今後行う予定のあるOSの学習方法では, 養成校や大学での授業, 大学院での授業, 研究を行う, インターネットでの交流, 他者への説明, 作業に焦点を当てた会話, 書籍を読む, セミナー参加, 仲間との勉強会, 他者の作業の話を聞く, の10カテゴリーの相関関係が示された. 経験したOSの学習方法では, 授業や研究, 自己学習, 他者との学習に分かれたが, 今後行う予定のあるOS学習方法では, 各カテゴリーが複雑に相関関係を示し, 研究参加者の今後のOS学習方法の広がりが示された. 参加者は, 今まで経験してきたOS学習方法よりも積極的に他の学習方法を取り入れようとしていることが明らかとなった.

IV. 考察

1. 作業療法の強化手段としてのOS学習

本研究の結果, OSを学んだ経験のある多くの作業療法士は, 作業の視点を得た, 作業の意味付けが増えたと回答しており, 両項目において, そう思うとする回答が全体の99.2%を占めていた. 各項目の相関関係からは, 作業の視点を得ることと作業の意味付けが増えることで, 作業療法実践が明確になることが明らかとなった. これらのことから, OSにより得られた知識は, 臨床で働く作業療法士の作業療法実践を明確化する可能性があると言及される. 作業療法士は作業の専門家である. 作業を用いてリハビリテーションを行う専門職であり, 作業の知識を活用し, 作業をクライアントに提供することが作業療法士の役割である. Lunt (1997) は, 「専門職の主要な目的は, 権限(能力)の回復であり, 知識のコント

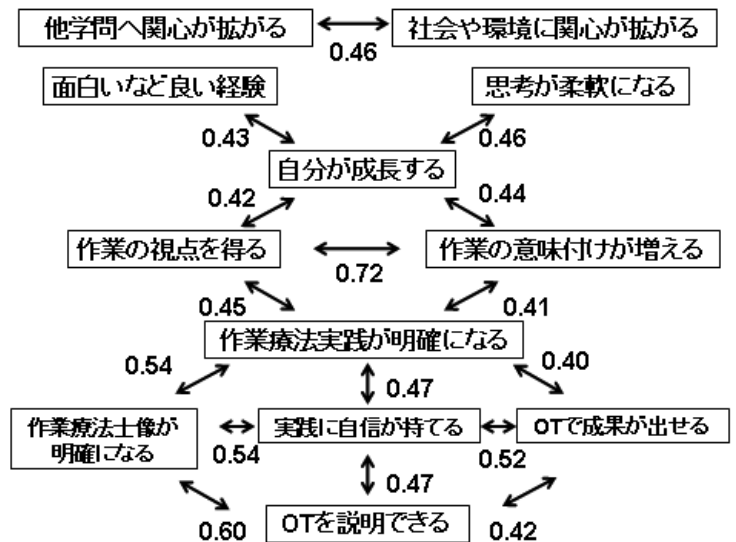


図4 作業科学を学ぶ意義の相関関係図

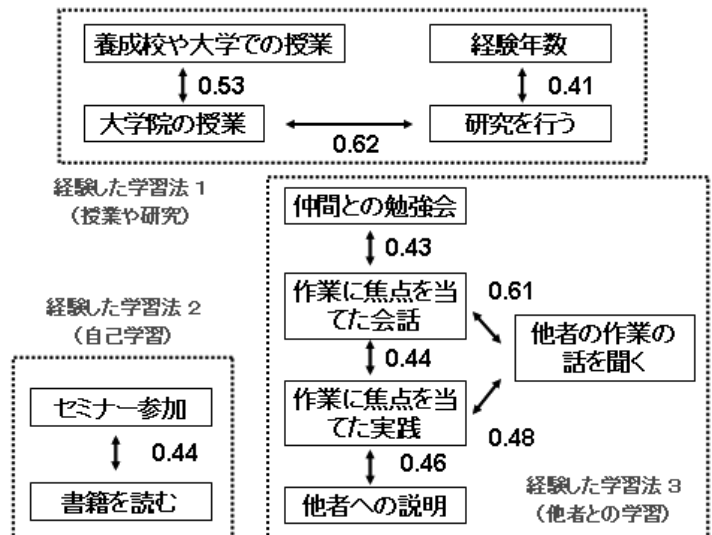


図5 経験した作業科学の学習方法の相関関係図

ロールはこれを成功させるための最も重要なメカニズムの一つである」と述べている. 本研究の対象者はOSを学ぶことにより, Luntの述べる作業の知識のコントロールが以前に比べて可能になったのではないかと考えられる. つまり, 作業の視点を得て, 作業の意味付けが増えることで, 作業療法実践を明確化し, 作業をより有効に活用する専門職に成り得たと推測できる. また, Pierce (2001a) は, 作業療法士が年齢や背景など, 個人的文脈に依存する作業を理解する必要があると述べている. 作業療法士が作業の視点を得ることや, 作業の意味付けを増やす・深めることは, Pierceのいう個人的文脈に依存する作業の理解を促進することにも役立つと考えられる.

OSを学ぶことで、作業療法士は、対象者の作業を意識し、尊重でき、自らが何を為すべきかを明確にすることができると考えられる。さらに、Larsonら(2003)は、個人にとって意味があり、重要な作業を中心として、文脈を考慮した作業療法を行うことを提案している。OSを学ぶことは、こうした作業を基盤とした作業療法を促進する可能性があると考えられる。

また、OSの知識は、作業療法士の活躍の場を拡げることにも役立つかもしれない。BryantとMckay(2005)は「OSによる新たな知見によって、伝統的に強いられてきた作業療法士としての役割から解放され、より独創的な仕事ができるかもしれない」と述べており、Whiteford(2000)は地域での非雇用や作業剥奪への作業療法士の関与を提案している。具体的な例としては、Ikiugu(2008)が、OSによって得た知識を用いることで、被雇用者の成長や会社組織の遂行の向上と可能性の拡大を図ることができるとしている。OSの作業の知識による実践の強化によって、作業療法士は医療機関以外へ活躍の場を拡げることができると考えられる。

2. OSによる作業療法士のアイデンティティの確立

作業療法士は、長い間、職業的アイデンティティの危機にさらされてきた。作業療法の歴史的背景から見ても、道徳療法から要素還元主義、システム理論への移り変わりの際には作業療法士としての職業的アイデンティティの危機が生じている(Kielhofner他,1977)。現在においても、理学療法士との違いは何か、自分の行っている作業療法で良いのかなど、臨床で悩む作業療法士も少なくない。近藤ら(2010)は、作業療法学生に対してOSの授業を行った結果、職業的アイデンティティに良い影響があったと述べている。本研究においても、OS学習は作業療法士像の明確化と作業療法実践の自信に影響を与えることが明らかとなった。このことから、OS学習は、作業療法士としての職業的アイデンティティの確立に良い影響を与えるのではないかと考えられる。作業療法士としての職業的アイデンティティに悩んでいる作業療法士は、OSを学び、作業の知識を得ることで、作業を基盤とした作業療法に自信を持つことができる可能性がある。また、作業療法士の専門的技術や専門職としての価値を調査した研究では、作業療法の知識や技術、実践において、作業が重要であるということが明らかとなっている(Aguilar他,2012)。作業の知識を得ることは、作業療法士としての専門性を高め、専門職としてのアイデンティティの形成に役立つと考えられる。

3. OS学習を促進するための課題

OSの学習方法では、経験した学習方法として、授業や研究、自己学習、他者との学習の3グループに大きく分けることができた。宮前(2008)は、OSを日本で発展させるために、テキストや論文の和訳が必要だと指摘している。日本作業科学学会が行っているJournal of Occupational Scienceの要旨の翻訳は、英語文献を読むためのきっかけとなる可能性はあるが、実際に和訳された文献や論文はまだまだ少ないのが現状である。作業科学の学習を促進するための今後の課題として、さらなる日本語文献や論文の執筆が必要であると考えられる。Pierce(2001b)は、作業の知識と作業に焦点を当てた実践の促進を結びつけるためには、創造的な対話や臨床現場での実践と普及、効果的な教育の3つが必要だと述べている。これには、勉強会や作業療法実践での作業に関する会話といった、他者との学習が有効であると考えられる。調査票の自由記載欄には、OSの小規模勉強会や地区別でのセミナーの開催を求める回答が多く認められた。OSに興味のあるメンバーを募り、勉強会を開催することなど、作業科学を学ぶ機会を増やし、他者と対話を行う機会を増やすことも課題の一つであると考えられる。臨床現場での実践と普及では、臨床で働く作業療法士がOSによってもたらされた知識を活用し、さらに、そこから生じた疑問を研究することが必要であると考えられる。Kielhofner(2005)は、学問と実践のギャップを埋めるためには、毎日の実践により近い研究を行う必要があると述べ、研究は実践を形作り、実践は研究を形作ることが理想であるとしている。本研究結果からは、授業や研究、自己学習、他者との学習の間に相関関係は認められなかった。今後、臨床で働く作業療法士が研究に興味を持ち、研究を行うことで、よりOSに対する理解が深まると共に、OSの普及に繋がると考えられる。効果的な教育としては、作業療法養成校のカリキュラムへの導入の必要性が考えられる。本研究の質問票では、養成校のカリキュラムに取り入れる必要性についての指摘があった。今後、OSが作業療法士養成校の必須科目となることを期待したい。

4. 研究の応用と限界

本研究は、OSセミナー参加者という特定の集団を対象としたもので、OSを学んだことのある作業療法士を対象としている。そのため、OSを学んだことのない作業療法士やOSを学ぶことは有益でないとする作業療法士の意見を含んでいない。今回は、OSを学んだ作業療法士がどのような変化を感じているかの調査研究であるため、

今後は、OSを学んだことのない作業療法士がOSを学ぶことで、どのように作業療法実践を変化させたかという調査が必要であるかもしれない。また、研究参加者が述べた臨床での成果については、その詳細は不明であり、実際に介入効果があったのかは分からない。OSを学ぶことがどのような成果に繋がるのかも引き続き調査が必要であると考えられる。

文献

- Aguilar, A., Stupans, I., Scutter, S. & King, S. (2012). Exploring professionalism: The professional values of Australian occupational therapists. *Australian Occupational Therapy Journal*, 59, 209-217.
- Bryant, W. & McKay, E. (2005). What's cooking? Theory and practice in the kitchen. *British Journal of Occupational Therapy*, 68, 67-74.
- Clark, F. (2006). One person's thoughts on the future of occupational science. *Journal of Occupational Science*, 13, 167-179.
- Frank, G. (2012). The 2010 Ruth Zemke Lecture in occupational science occupational therapy/ occupational science/ occupational justice: Moral commitments and global assemblages. *Journal of Occupational Science*, 19, 25-35.
- グレッグ美鈴, 麻原きよみ, 横山美江 (編著) (2007). よくわかる質的研究の進め方・まとめ方. 第1版. 医歯薬出版株式会社.
- Ikiugu, N. M. (2008). A proposed conceptual model of organizational development for occupational therapists and occupational scientists. *OTJR: Occupation, Participation and Health*, 28, 53-63.
- Kielhofner, G. & Burke, P.J. (1977). Occupational therapy after 60 years: An account of changing identity and knowledge. *American Journal of Occupational Therapy*, 31, 675-689.
- Kielhofner, G. (2005). Scholarship and practice: Bridging the divide. *American Journal of Occupational Therapy*, 59, 231-239.
- 近藤知子, 大松慶子, 西方浩一 (2010). 作業療法学生は作業科学授業をどのように受け止めたか. *作業療法*, 29, 195-206.
- Larson, E., Wood, W. & Clark, F. (2003). Occupational science: Building the science and practice of occupation through an academic discipline. In Crepeau, B. E., Cohn, S. E., Boyt-Schell, A. B. (Eds.), *Willard and Spackman's occupational therapy 10th ed.* Philadelphia, Lippincott Williams and Wilkins. pp. 15-26.
- Lunt, A. (1997). Occupational science and occupational therapy: Negotiating the boundary between a discipline and a profession. *Journal of Occupational Science*, 4, 56-61.
- 宮前珠子 (2008). 作業科学の系譜と今後の発展. *作業科学研究*, 2, 2-6.
- Molke, D.K., Laliberte-Rudman, D. & Polatajko, H.J. (2004). The promise of occupational science: A developmental assessment of an emerging academic discipline. *Canadian Journal of Occupational Therapy*, 71, 269-281.
- Mounter, R.C. & Ilott, I. (2000). Occupational Science: Updating the United Kingdom journey of discovery. *Occupational Therapy International*, 7, 111-120.
- Pierce, D., Adler, K., Baltisberger, J., Fehring, E., Hunter, E., Malkawif, S. & Parr, T. (2010). Occupational science: A data-based American perspective. *Journal of Occupational Science*, 17, 204-215.
- Pierce, D. (2001a). Untangling occupation and activity. *American Journal of Occupational Therapy*, 55, 138-146.
- Pierce, D. (2001b). Occupation by design: Dimensions, therapeutic power, and creative process. *American Journal of Occupational Therapy*, 55, 249-259.
- Whiteford, G., Townsend, E. & Hocking, C. (2000). Reflections on a renaissance of occupation. *Canadian Journal of Occupational Therapy*, 67, 61-69.
- World Federation of Occupational Therapists (2012). Position statement on occupational science. <<http://www.wfot.org/ResourceCentre.aspx>> (参照日: 2012.7.10.)
- Yerxa, E. (1993). Occupational science: A new source of power for participants in occupational therapy. *Occupational Science Australia*, 1, 3-9.
- Yerxa, E. (2000). Occupational science: A renaissance of service to humankind through knowledge. *Occupational Therapy International*, 7, 87-98.

【原稿受理：2012年9月6日】